

2024年12月19日(木)

老球の細道843号

中学校部活動地域移行は大丈夫か

会津バスケットボール協会 室井 富仁

かつて会津地区の中学校バスケット界には「会津の三狂」(敬称の意味を込めて)とリスペクトされた先生方がいた。斎藤哲二先生、鶴川正勝先生、結城俊彌先生である。この3人の行く中学校のバスケット部は必ず県大会優勝、地区大会優勝をしていた。勝利のみではなく選手、保護者からも絶大なる信頼を得て指導に当たり、選手が高校へ進学してからも高校への大会に顔を出し、自分たちの教え子の成長を楽しみに観戦していた。

私は30代の頃、若手の指導者を集めてこの3人の先生たちの指導哲学、指導方法を学ぶ勉強会を開催したことがある。皆それぞれ独特の個性ある先生方であったが、共通しているのは選手に対する愛情とバスケットボールに対する飽くなき情熱であった。高校の東北大会や全国大会、オールジャパン、インカレ等の観戦で、この3人の先生にはよく会ったものである。余談であるが、斎藤先生は書道、鶴川先生は写真、結城先生は絵画などでそれぞれプロ級の腕を持ち、まさに「一芸に秀でる者は多芸に秀でる」を見事に体現していた。

このようなレジェンド指導者が退職してから久しいが、今や中学校部活動が教員の多忙化から来る働き方改革や少子化によるチーム編成困難の状況から存亡の危機を迎えている。文科省は部活動を学校から地域へ移行させる方針を決定している。

当初の予定では2023年度から3年間を「改革集中期間」と称し、会津若松市も含めて全都道府県で休日の部活動を地域移行する試みが実施されている。そして最終的には平日の部活動も地域へ移行する予定になっていたが、先月スポーツ庁から2031年度まで移行期間を延長する方針が示された。各自治体から「3年間での達成はむずかしい」との意見が多数出たようである。

そんな折、11月末に熊本市教育委員会が突然「公立中学校の部活動を地域移行しない」という方針を発表した。理由は「部活動の自己肯定感、責任感などを養成する教育的意義を大切にしたい。そして、ケガや指導のハラスメントに対する対応を学校サイドで責任をもって行いたい」ということであった。さらに、教員の多忙化に対する対処として、部活動を指導する人材を市が責任を持って確保する。指導を希望する教員、学生、インストラクター、外部指導者から希望を募り、1つの部に2人の顧問指導者を配置し、正顧問には時給1,600円、副顧問には1,000円を支給するという。もちろん財源も確保している。

今さら説明するまでもないが、地域移行へのメリットは、専門家の指導による高い技術の向上、人数が揃いチームスポーツの活動参加、教員の負担軽減などがあげられる。一方デメリットとしては、指導者や練習場所の確保の困難、子どもの送迎や活動費など保護者の負担、活動時間の遅さによる生活リズムの狂い、そして指導の過熱化などが挙げられている。

学習塾があるように、希望する者は地域クラブで練習。部活動も外部指導者などを招聘し放課後学校で練習できるようにする。そんな両輪体制が望ましいのではないだろうか。